内郷村報

天法人則ニ從順ナルベシ

天地の公道と世界の平和

—歳暮感慨—

大内民惠

鳥兎匆々、多事多端にして、しかも複雑怪奇を極めた本年も、剩す處十有余日日支事變の第三年、歐洲動亂の第一年を迎つて、光輝ある皇紀二千六百年を迎へることゝなつた。

靜座瞑目、戰線に於ける東西無慮幾百萬將兵と、其銃後に於ける、各國無慮幾億千萬國民の、其生活、其緊張、其覺悟を思ふ時に、轉た斷腸の思ひに堪へざるを覺ゆるのである。

× ×

國の爲いたておふ身のうつしゑを
みるに涙ぞ催ふされける

これはこれ日露戰爭當時に於ける　昭憲皇太后の御歌である。過去三年の間、我々は日々の新聞に、月々の雜誌に、將た目のあたり無言の凱旋をせられた將兵の御遺骨、痛々しき白衣の歸還將兵を迎送する時に、畏けれども、御歌を拜誦繰返しつ、其等の方々に對して、涙ながらに感謝の微衷をいたすと共に、其御一族の御心中、さては其將來はさこそと、又更に感涙にむせぶのである。而して同時に　明治天皇の

四方の海皆はらからと思ふ世に
なぜ波風のたちさわぐらむ

の御聖旨を拜誦して、四海は同胞である、如何なればこそ其同胞が、一國を擧げ、一身を捧げ、あらゆる國民、あらゆる物資を犧牲として、慘又慘の極致なる戰爭なるものを、やらなければならぬかと、痛切に考へさせられるのである

× ×

而して此戰爭なるものを此世の中から絶滅する方策はあらざるかと、いふやうな大それた考も、念頭に浮んで來るのである。されこんなことをいふと、一般の人々は、人類の歷史を見よ、有史以來、世界は戰爭によつて、興亡盛衰を繰返して居るのではないか、將來に於ても、必ずや過去の如く、又戰爭と興亡とが、繰返さるゝのであるといふであらう。されと予はこれに對して、次のやうな意見を高唱して、全人類の反省を促したいと思ふ。

× ×

先つ我建國以來の歷史を檢討し、明治維新に於ける明治天皇の皇獻を拜察し爾來七十余年間に於ける、國運の進展海内の平和と、絶叫せざることを凝視せよと、蘇峯學人が、るを得ない。日本精神の化身に在すと申上げた　明治天皇は、明治元年に、我國の國是たる五ケ條の御誓文を下賜せられ

又明治二十三年には、千古不磨の大典章　教育勅語を煥發せられた。

天地の公道と仰せられ、之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らずと宣はれた、御聖旨の實行は明治初年に於ける、三千余萬の同胞も、現在に於ける一億萬の國民も、之を眷々服膺することを、其本務と心得て居るのである。申す迄もなく　神武天皇肇國以來、明治維新に至る迄、二千五百余年の間は、我國に於ても戰爭と興亡とは繰返された。されど明治維新以來其草創の際、僅かに西南戰役其他二三の小戰役は、なきにもあらずであつたがこれ何れも　天皇を中心とした、見解の相異に、其端を發したものであつて、赫々たる旭日下に、雲散霧消し、次いで國是は確立して國運進展今日の隆盛を致し天壤無窮の皇運を扶翼する事が、上下をあげての本分と、心得て居るのが、今日に於ける我國の姿である。されば我海内には、將來天壤無窮、絶對に戰爭のあるべき事は、夢想だもなし得ない次第である。茲に於て我日本精神、天地の公道、教育勅語の聖旨を、全世界に宣揚することによつて、戰爭を絶滅する、敢て不可能といひ得ざるにあらずやと、思はれるのである。

× ×

地球上の土地海洋は、地球上のあらゆる人類が、之

—以下第二面へ—

内郷村報の六大使命

一、政黨政派を超越して、村力充實主義を標榜す。
二、村内公私各機關の活動狀況を報導し併せて其協調を計り、總力戰の實現和衷努力の實現を期す。
三、本村社會事業の徹底を期す。
四、村内の善事奬行を密接し、且其發展向上を期す。
五、本村と本村出身者及本村關係者との聯絡を計り、且其發展向上を期す。
六、尙餘力を以て、國民善導に當る

本紙發行は大内一家の事業にして、其の經營は子孫に關する重責を負ぬるものなり

◇從業員大募集！

員貳千名（經驗が無くても仕事が出來ます）

内譯
採炭夫　一七〇〇名
支柱夫　五〇〇名
坑内運搬夫　一〇〇名
坑内機械夫　一〇〇名
坑内工作夫　五〇名

滿十六歲以上五十歲まで（身体壯健のもの）
實費會社にて負擔いたします
一日三圓以上五圓（請負制として就業時間八時間乃至拾時間）
世帶持には社宅を無料で貸與します
獨身者のために寄宿舍あり（食費寢具共一日五十錢）
綴坑、住吉坑、町田坑（常磐線綴驛下車）長倉坑湯本驛下車
希望者は最寄職業紹介所か町村役場又は直接會社に御申込下さい！

年齢　旅費　賃金　住宅　寄宿　就業場所

東北第一の大炭礦!!

磐城炭礦株式會社礦業所

（福島縣石城郡内郷村大字綴）

毎月一回十五日發行

本紙定價一部金五錢一ヶ年郵税共金四十八錢
發行所　福島縣石城郡内郷村宮字宮淵二　内郷村報社
編輯發行兼印刷人　右全所　電話内郷二八四二〇　大内民惠
印刷所　福島縣平市一丁目二九　平活版所

◎本紙贊助金寄贈芳名

金拾圓　二本松　野地菊司
金壹圓五拾錢　中村渡邊久男
金壹圓　北海道横山昌秋
金五圓　平市南波正

―第一面より續く―

を享受し、八紘一宇、大和共榮するのが、天地の公道であり、敎育勅語の聖旨である。あらゆる人類が、之を實踐する事によつて、我帝國の如く、戰爭は絶滅する事となるのであると、確信せらるゝのである。

刻下の日支事變は、蔣一派をして、其大道に準據せしめん爲に、我國が多大の犧牲を拂つて、泣いて馬稷を斬りつゝあるのである。

希くは上下協力、一日も早く聖戰の目的を達成し、東亞の新秩序を確立すると共に、進んで西歐の列國は勿論、全世界に　明治天皇の仰せられた

波風はしづまりはて、四方の海
てりこそわたれ天つ日のかげ

其天つ日のかげ、天地の公道を宣揚して、世界の平和、人類の幸福を實現したいものであると、衷心から考へさせらるゝのである。

宮の火災

十二月一日午前一時四十分頃、大字宮字竹之内に火災起り、警防隊其他必死の活動ありしも、用水が十分でなかつたので、遂に參拾四戸を鳥有に歸した。沼田村長は即刻現場に出馬、罹災者救助に奔走し、其避難炊出し等應急の處置を講じ萬事遺漏なきを期した。又磐城炭礦よりは、勞務係員が駈けつけて、其從業員の罹災者を探し出して、特に社宅に收容したので、其人々は心から感激したとの事であつた。而して內郷村からは、取敢へず一戸當り金拾圓宛を見舞ひ、出征兵の家族には、更に五圓を增額した。愛國々防婦人會幹部も、打ちつれて罹災者を歷訪して見舞金を贈呈し、菅原礦務所長を始め、村方面委員、附近町村の代表者、罹災者の近親等多數の慰問者が參集した。次いで見舞金寄贈者の氏名は左の通りである。

金百圓、磐城炭礦。金百貳圓、木炭十俵、島田兼吉。金五拾圓、惠原猪三郎。木炭五十俵、佐藤三平。金五拾圓、平市。金五拾圓、若松總太郎。金拾圓、廣木屋金五圓、高萩佐重。金貳拾圓、佐藤作藏。金拾五圓、大字宮本戸一同。金參圓、酒井喜兵。金八拾七圓、瀧組合。金參拾圓、平太郎組合。金貳拾壹圓四拾錢、町田組合。金四拾貳圓五拾錢竹之內組合。金拾圓、五十嵐一也。金拾圓、長倉炭礦國防婦人會。金參拾圓、鈴木辰三郎。金拾圓、蓮沼龍輔。金拾圓、鈴木喜政。金五圓、白河町共濟會。金五圓、現役齋藤藤明。金貳百圓、湯本町。金五圓、入山納稅組合。金貳拾圓、大野村。金拾圓、大塚諭。金參拾圓、宗像啓次。金百圓、戸部炭礦。金參拾圓、惠比壽炭礦。金參拾圓、日野炭礦。金拾圓、江連清明。金拾圓五拾錢、大野大字中島一同。金參拾圓、釜屋商店計金壹千百參拾貳圓四拾錢計木炭六拾俵。以上

各省聯合時局問題研究協議

內閣情報部並に本縣合同主催の同協議會は、十二月七日午前九時より、縣敎育會館に開催。情報部及外務大藏、陸軍、海軍、商工、農林の各省よりは、夫々代表官、縣下からは、關係高等官、各市町村長、各學校長、精動實行委員等五百余名、本村からは沼田村長及び精動委員としての記者が之に出席した。午前は都村外務事務官の「日米通商條約に就いて」元泉海軍少佐の「歐洲戰爭の帝國に及ぼす外壓と使命」川本拓務書記官の「時局と南方發展」の講話があり、午後は高橋縣警察部長が座長となつて、豫て出席者中より提出してあつた、約五十余の質問に對して、夫々各省派遣官より應答があつて、午後四時閉會した。此日記者は

一、海外に於ける第二世敎育に關して、當局の御方針を承りたし。

二、日支事變は、支那に於ける排日敎育、抗日敎育に其端を發したるものと信ず。故に其當初に於て、我外務當局が、之に善處すべかりしものと思はる。之に對する當局の御意見如何。

三、外務省高等官各位が、貿易省設置問題に關し、其意見の容れられざる理由を以て、同盟辭表を提出したる行爲は、我國民精神に背反するにあらざるなきか、之に對する當局の御意見を承りたし。

右三項は、添附したる內郷村報に掲載したる、拙者の論說を參照せられんことを望む。

の三題を提出、當局の說明に對して、更に反問して其徹底を期せんとしたのであつたが、座長は之を打ちきりたるを以て、遺憾ながら其を中止せざるを得なかつた。但該協議會に對する記者の概觀、並に記者の質問に對する答辨の批判等に就いては、後日親しく當局と懇談し研究して、之が解決を計らうと思つて居る。而して閉會後、出席者中より、數氏が刺を通じて、記者の意見に贊同の意を表せられ、又左の如き書を寄せられた人もあつた。以て此問題に對して如何に深き關心を持たれた事かを證する事が出來た。

（前略）先生の日本精神、外務省の御役人の說明　私も意氣地なしで、自分で自分が呆れる程で、物は云ひませんでしたが、あの時先生の後について、一言申したかつた事ば山々でした。先生ならでは云ひ得ぬ事、私共が云はんとして言ひ得ざる所を、言つて下さいました。誠に痛快でした。（後略）

入營兵送別會

本年入營兵の爲、十一月二十六日午後一時より、家政女學校內に開催。金澤助役開催を宜し、宮城遙拜、國歌齊唱、戰死者に感謝、出征將兵武運長久祈願の爲默禱を捧げ、沼田村長及上原磐炭郷軍分會長の、熱烈なる送別の辭、鈴木第三校長の祝辭、兵事主任の注意入營兵總代草野三郎君の答辭、村よりの餞別贈興等ありて簡素なる宴に移り、午後三時萬歲を三唱して散會した。因に時局下國家の干城として、入營する壯丁諸君の意氣は頗る軒昂たるものであつた。

陸郵字之吉
矢野恒太序　大內民惠著
敎育制度改革概論
（四六版二一一頁　定價五十錢　郵稅六錢）
行き詰れる現代の敎育制度を解體して、學理と實際と、歷史と實驗とから新に大內案九主義を提唱す。天下知名の士の贊同枚擧に遑あらず。されど未だ一人の抗議者も現はれず。

我國敎育學界の權威
前京大總長小西重直博士
書を寄せて曰く、多年ノ御體驗ト實地ノ御試練ニ基ク眞摯愛國ノ大精神ヲ拜味仕リ不忍感激ニ打メレ申候云々。

發行所　日本評論社　東京京橋三丁目
取次所　內郷村報社

村會記錄

十二月十八日午後一時より、村會を招集左記二件を

の挨拶ありて座談會に移り相互意見の交換を行ひ、午

其勞と、それに應じた一般の認識とは、大に多とすべきである。

禮力章檢定

十一月二十五、二十六日兩日晝夜三回に亘り、宮綴兩劇場に於て映畫會を開催、純益金七百四拾余圓を擧げ

する以て、其日の生活とする町田の無名子は、又此程も本社を通じて金六圓を村銃後會に寄附して、關係者に感謝せしめた。

村會記錄

十二月十八日午後一時より、村會を招集左記二件を附議決定した。

一、寄附採納の件。

二、昭和十四年度、内郷村歳入歳出追加豫算議決の件。

結核豫防協議會

今春皇后陛下より下賜せられたる御命旨を體し、本村にては十一月十八日村會議事堂に協議會を開催して其方策を講ず處あつた。

御殿主婦會

同會にては從來出征兵士百余名に對し、家族の寫眞をとつて送つたり、内郷村報を送つたり、あらゆる慰問の方法を講じ、戰地よりは其禮狀が多數來て居るとの事である。而して大賀俣吉氏の絶大なる後援を多とせられて居る。

綴郵便局の貯金座談會

同局にては、十一月二十五日午後一時より、百億貯蓄の國策に副ふべく、村會議事堂に於て、各納稅組合長、各小學校長等の參會を求めて、座談會を開催した四家局長開會の辭と希望とを述べ、來賓小川郵便局長の挨拶ありて座談會に移り相互意見の交換を行ひ、午後三時閉會した。當日は特に局長より折詰の贈呈もありて、一同感謝して散會。

出征軍人家族慰安會

役場及學校主催にて、十一月二十日午前十時より、淺野記念館に開催。出席者約四百五十名（幼兒を伴ひたる婦人最も多し）。來賓多數參列。堀校長の開會の辭、國歌奉唱默禱、沼田村長の挨拶、來賓代表四家又一氏の祝辭、小學校兒童の唱歌、遊戯、劇等二十番にわたる演技を、一同平素の辛勞を忘れて之を觀覽。終つて招待代表生田常弘氏の謝辭あり、萬歳を三唱して午後二時散會した。

陪審員候補者抽籤

十一月二十二日村役場に於て、今年調査した資格者百二十九人中、抽籤の結果小島昇、鈴木甚吉、野木亀之助の三氏當選した。

反毛運動

愛國婦人會並に女子青年團員は、全村より毛糸毛織物の廢品を蒐集したるに、約百二十貫の多きに達した其勞と、それに應じた一般の認識とは、大に多とすべきである。

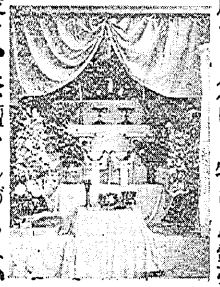
體力章檢定

十一月二十一日より一週間、會長沼田村長、檢定委員堀、增子、遠藤、鈴木の各校長、補助檢定委員各小學校男教員全部、青年團副團長、青年團幹部七十六人の陣容を以て、各小學校々庭に於て之を實施した。受檢者は一九八三人。内磐炭八〇三人。

愛國婦人會の活動

國防婦人會の同會にては資金造成の爲

尋常高等小學校の慰靈祭



慰靈祭壇

同校にては、職員兒童一體となつて、勤勞作業によつて得たる淨財を以て、學校關係戰死者の精靈を祭祀する爲に、特に忠靈室を設け、祭壇をしづらへ、毎月興亞奉公日と、其命日とには之を禮拜慰靈するといふ、いとも美しき慣例をつくつた。其設備全く成つた十一月二十五日には、堀校長が中心となつて、全校全員參列、僧侶を招聘して、先崎俊治、渡邊新三郎、長塚育太、椎根菊雄、田邊操遠藤平右工門の六勇士の精靈を奉安して、嚴肅莊重なる慰靈祭を執行した。尚當日は、其六勇士の寫眞を掲げ、遺物の數々を陳列して一同其忠勇を讃仰追憶した

町田無名子の美擧

敬神崇祖の念にあつく、勤儉節約、社會事業は勿論あらゆる公共事業に、奉仕するを以て、其日の生活とする町田の無名子は、又此程も本社を通じて金六圓を村銃後會に寄附して、關係者を感激せしめた。

芳菊堂主前田氏の篤志

方面委員としての記者は區内の某氏が强度の喘息に苦しみ、同堂（双葉郡幾世橋村）發賣の「加減清肺湯」の特効あるを知りつゝも其を求むる資力なきを訴へて來たので、其旨を同堂に通じ、一週間分の施藥を乞ひたるに、直ちに寄贈せられたので、某氏に傳達したるに、感激の涙を流して居つた。

十一月二十五、二十六日兩日晝夜三回に亘り、宮綴兩劇場に於て映畫會を開催、純益金七百四拾余圓を擧げた。

沼田家の慶事

沼田村長の二長紀子孃は、生田目氏夫妻の媒妁により十二月十五日入山炭礦の大澤善次郎氏と結婚。新郎は盛岡高工出身の秀才、新婦は磐高女出身の才媛。

磐炭記事抄錄

▽十一月十九日、午前十時より平市公會堂に於て、健康保險組合聯合會主催にて厚生省社會保險局庶務課長磯部巖氏臨席の下に、常磐地方に於ける、磐城、入山古河好間其他保險組合關係の、十ヶ年健康被保險者の表彰式を擧行せらる。磐城炭康關係被表彰者は、藁谷信季、山田洗、佐藤倉次、比佐虎松、門馬政亀、白石カメヨの五氏であつた。

▽十一月二十六日、體力章檢定試驗を實施す。受檢者八〇三名中、上級合格者は綴坑運搬夫突戸榮助、製作課職員植松力男、礦業所康務係職員大平暢三郎の三名であつた。

▽同日、福島縣廳主催の貯蓄奬勵活動映寫會を、淺野翁記念館に開催す。

▽十二月五日、記念館に於て、商工省燃料局鈴木炭業課長出席、常磐主要炭礦石炭增産懇談會を開催。

▽十二月六日、長倉第四坑開坑式擧行。

教育制度改革概論

（四六版二二一頁　定價五十錢　郵稅六錢）

理學士 大内民憲 著
文學士 矢野恒太 序

行き詰れる現代の教育制度を解體して、學理と實際と、歴史と實驗とから新に大内案九主義を提唱す。天下知名の士の贊同枚擧に遑あらず。されど未だ一人の抗議者も現はれず。

我國教育學界の權威

前京大總長小西重直博士

書を寄せて曰く、多年ノ御體驗ト實地ノ御試練ニ基ク眞摯憂國ノ大精神ヲ拜味仕リ不堪感激ニ打タレ申候云々。

發行所　日本評論社　東京市本郷區三丁目

取次所　内郷村報社

大内齊茂君追悼の辭【一】

大内民惠

本紙九月號に掲載した「琴瑟相和し精勵二十餘年、大内齊茂君夫妻の奮鬪史、其結晶五百萬圓」の主人公たる大内君は、十一月八日固疾惡化して、終に永眠せられたのである。此一文は、同十日夜、其靈位に對して、涙ながらに申上げた、追悼の辭の大要を補正したものである。

大内君！人生は眞に無常！！今夜こゝに幽明界を異にして、相對しやうとは、夢想だもなし得なかつたのである。此部屋に於て、令兄齊弘翁、支配人齊藤君及び予と四人で、晩餐を共にし、メロンを賞味しつゝ、予が内郷村報と常磐中央新聞とに、執筆掲載した、拙い君の奮鬪史を、賞揚し恐悦してくれたのは、實に去る二日であつた其日君には、身に微恙あるものゝ如く、幾度か立つて席をはつし、醫を呼び、藥を飲まれたやうに、見えたのであつたが、相變らざる元氣な調子で話もかわせば、電話にもかゝり、平素と更に變つたところはなかつたのである。而して先きに予に執筆を託されてあつた原稿を一覽して、それを印刷するに就いて、印刷屋と打ち合せる爲に、予を煩はしたいと云はるゝので予は支配人に同行を乞ふて、お暇をしたのであつた。其時君が「お夕飯は洋食を差上げよ云々」と支配人に耳語するを見た予は、今更ながら、其行き届きたる御厚情を、感謝させられたのであつた。而してこれが永久のお別れとなつたのであつた。

× ×

翌三日早朝復命を乘れて、色々の相談にもと參邸したるに、時しも君は、肺氣腫と腎臓麻痺の重態！面會は絶對謝絶との事、辛うじて令兄に面接して、其容態を承り後髮をひかるゝ思ひをなしつゝ退邸、尚滯京して其後の經過を見なければと、深く考へたのであつたが、五日には縣下方面委員大會が白河に開催せられ、予は其提案を説明する、責任を負ふて居つたので、翌四日退京せざるを得なかつたのである。かくて七日には、令兄より、經過良好との御報告をうけて、喇か愁眉を開いたのであつたが、翌八日「危篤」の悲電に接し、倉皇上京した其時には、君は既に此世の人ではなかつたのである。

× ×

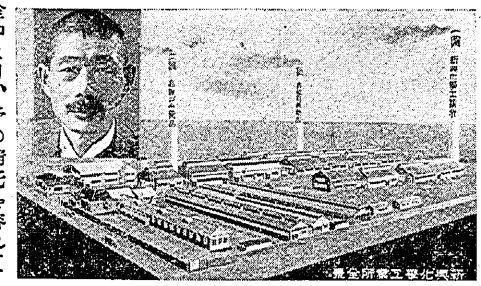
回顧すれば、予が君をよく相知つたのは、今から四十年前の今頃君が二本松淮教員養成所在學時代予の庭の（安達郡杉田村）柿の實の熟した時で、二本松高等小學校時代、一級下の同窓たる關係から大山村よりの歸途、予を訪問せられた時であつた。君が柿をかじりながら、養成所に於ける約十冊に及ぶ教科書を、何處でもすら〳〵と暗誦し、意氣軒昂あたるべからざる、風丰に接した予は、將來恐るべき偉材であると、呪んだのであつた。其後君は兵に徵され、現役三年を務めて歸郷、又幾千もなくして、日露戰役に出征、平和後予が渡米準備の爲、福島市にあつた頃、突然來訪、實業方面に活躍して見やうと思ふから、一つ然るべき處へ、周旋をしてもらひたいと云はるゝので、予は當時有名であつた、高木菜子本店の庶務係に御世話をしたのであつた。君の忠實なる勤務振りは、大に同店の信頼を博したのであつたが、池中の伏龍は、昇天を望んで止まず、中央に出でて、一大飛躍を試みんと、再び予に其斡旋方を求めて來たので、予は知己であつた、當時教育物の出版界に、名をなした東洋社主石川正作氏に紹介して、それに入社したのであつた。かくて予は渡米して、爾來十有餘年後、予が歸朝して、君に會つた時には君は、今の製劑事業にスタートを切つた時であつたのである。

× ×

其當時予は、故大隈侯や安部磯雄氏等の後援の下に、海外に於ける第二世指導機關、春風學園を經營して、少なからざる資財を投じたるも、時期尚早の故を以て、之を閉鎖し、新たに七年會を創立し、之亦少なからざる資金を要したるを以て、君に其流資を仰ぎたるに君は草創の際、其豐かならざる資金中より、予の請託を容れてくれだのであつた。

而して予は磐城に、君は東京に、鋭意奮鬪する事十餘年。昭和十年六月上京の序に君を訪問した時には、板橋には廣大なる大工場を構へ、日本橋には堂々たる店舗を張り、世界的に飛躍しつゝある光景に當面して、（寫眞參照）予は一驚を喫すると共に之ある哉と、感嘆之を久しうしたのであつた。又其當時、互に往時を談じつゝ、夫人ともく至らざるなき歡待を忝うした事も、忘れられざる思ひ出の一つである。其後五年を經て本年に入り、君の事業は益々向上發展の一路を辿り、其に應ずる施設其他に就いて、種々應援をしてもらひたいから、上京の序があらば、是非來訪してほしいと、再三手紙を寄せられたので、特に上京して君を訪問したのは、九月十四日であつた。

—末完—



五年前の工場と故大内齊茂君

井上瀝青子先生歡迎句會　麥笛吟社

十二月六日午後六時三十分より淺野翁頌德記念館日本間に於て、今回磐炭礦業所に、經理部長として來任せられた、井上瀝青子先生歡迎の句會を開催したるに、馳せ參じたる同人會員二十三名に及び、冬の夜、干菜、笹鳴の三題を通じて七句を作句。三昧に入ること三十分。型の如く選句を行ひ、撫山之を披講し、十時趣味津々、和氣藹々裡に終了す。

井上瀝青子

納屋の壁落ちしまゝなる干菜かな
最終の氣動車に在り夜半の冬
鑄鐵の硬度守りつゝ夜半の冬
笹鳴や廓の跡と云ふ旅館　志賀野壽司
窓開けて干菜の音を知りにけり
笹鳴やこゝも昔の坑の跡　原ひでを
仕事着を干菜の繩に干すことも
笹鳴や椿の蕾まだかたく　石田修二
海を背に芭蕉の句碑や笹子なく
近づけば笹鳴き遠くなる氣配　江連半仙
老一人住み居る軒の干菜かな
ふゆの夜や氷を砕く壁隣り　林若樹
冬の夜の枯枝月をさゝへたる
日かげればこぼす霰やほし菜風呂　關本雲浦
笹鳴や眼下に展く風の海　宮竹の内火事
干菜宿避難の宿となりにけり　高萩六王
冬の夜や火事におびいて睡らぬ子
白水高野山
血の池と云ふ窪地あり笹子鳴く　秋山紅花
陽の緣に翁や一人干菜編む
冬の夜や提灯低く通りけり　小沼謠山
掛け足して来だ日の淺き干菜かな
笹鳴や峠こゆれば永戸村　磯井潮風
水ばなをすゝりつ老爺菜をほせり
笹鳴や水車をめぐる藪たゝみ　三森溪水
夜半の冬時計の音のみ高く
笹鳴にフト足止めてきゝにけり　鈴木素舟
紙漉きの灯の寒々と夜半の冬　岡田岱一
笹なきや藪にからまる茨の實　一條素人
物の高値要と嘆けり冬の夜　田中秋星子
冬の夜やひつそりとして山の驛　米川草城
母逝きて縫妻侘し冬の夜　早川溪流
吊ほし菜ゆるゝ影ある障子かな　松本愛花
ほゝ菜編む媼に今日も晴れつゝく　佐藤秋水
炭礦の灯の空明して夜半のふゆ　川端はしめ
子供等の遊び場所なりほし菜吊る　栗崎曉山
ふゆの夜や急行らしき汽車過ぐる　高木撫山
通され！部屋さまけれど笹なきす
百姓の我家たのしも懸ほし菜　常夜の句會風景
ふゆの夜や少年句座に沈吟す

◎本紙贊助金寄贈芳名

金拾圓　二本松　野地菊司
金壹圓五拾錢　中村　渡邊久男
金壹圓　北海道　横山昌秋
金五圓　平市　南波正

昭和八年八月（第三種郵便）

内郷村報の使命

一、政治經濟の變遷を觀察して、村力充實主義を標榜す。
二、村内公私各機關の活動狀況を報導し併せて其協調を計り、總現和總努力の實績を期す。
三、本村社會事業の徹底を期す。
四、村内の各本邦行を察察し、遺漏なき樣勵す。
五、本村と本縣出身者及本村關係者との聯絡を計り、以て其發展向上を期す。
六、尚餘力を以て、國民教導に當る

本紙發行は大内一家の事業にして、其の編輯は子孫に對する遺言を敬ぬるものなり

而して此戰爭なるものを此世の中から絶滅する方策はあらざるかと、ふやうに

又明治二十三年には、千古不磨の大典章　教育勅語を煥發せられた。天地の公道と仰せられ、

を發したものであつて、赫々たる旭日下に、雲散霧消し、次いで國是は確立して國運進展今日の隆盛を致し

昭和一四年十二月五日發行

本紙定價一部金五錢一ヶ年前拾金四十八錢
郵便料金　福島縣石城郡内郷村字宮四二
發行所　内郷村報社
編輯兼發行兼印刷人　大内民惠
印刷所　福島縣平市二丁目二九　平活版所